

最小限「注文の多い料理店」復元の試み

A Study on the Reconstruction: the Minimum Plan of the Busy Orders Restaurant

水 野 信 太 郎*
Shintaro MIZUNO

I は じ め に

本稿は宮澤賢治（みやざわ・けんじ，1896～1933）の童話「注文の多い料理店」に登場する建築物を空間として具体的に視覚化する試みである。賢治の原作を最大限に尊重し、その他の諸要素を鑑みて当研究としての復元平面図を提案する。その結果「注文の多い料理店」の姿が、建築学的な視点から見ても一定の合理性を備えたものである点を示すものである。

童話作家である宮澤賢治の作品としては「注文の多い料理店」は、読者に恐怖の感を抱かせる特異な実例である。賢治が「注文の多い料理店」を執筆したのは、大正10（1921）年11月とされる。同時期に、村人たちと山林とが関わり合った歴史などを語って、地名の語源譚めいた「狼森と叢森，盗森」も創作している。一方、大正10年は賢治の理解者であり、すぐ下の妹でもあった宮澤トシ（1898～1922）が満24歳と22日で病没する前年であった。したがって妹の病氣という不安要素はあるものの、著名な「永訣の朝」や「無声慟哭」を手がけなければならぬほどの状況ではなかった。それにもかかわらず宮澤賢治は童話という子供を読者に設定して書かれたはずの文学作品において、何ゆえに恐ろし気な世界を展開したのであろうか。

その点に関して筆者は「注文の多い料理店」に、近代西洋先進国を至上の到達点と目する当時の国内情勢に対する賢治の懐疑的な心理や立場が反映されていると感じている。その一端が作品冒頭の

二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、びかびかする鉄砲（以下略）という設定に表出されている。さらに彼ら2名の、生命に対する不遜な意識は

「(前略) なんでも構わないから、早くタンタアーンと、やってみたいもんだなあ。」

「鹿の黄いろな横っ腹なんぞに、二、三発お見舞もうしたら、ずいぶん痛快だろうねえ。

くるくるまわって、それからどたっと倒れるだろうねえ¹⁾。」

の発言に隠しようもなく露呈している。宮澤賢治自身は熱心な仏教徒であった。このため、無意味に自然界の動植物から命を奪う行為を嫌っていたのであろう。つまり「無益な殺生は決してすべきでない」と、よくいわれる言葉通りである。仏教聖典には次のように記されている。

三、仏は、仏に成ろうとして殺生の罪を離れることを修め、そしてその功德によって人びとの長寿を願った。

*北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科

写真-1 菊池武雄の作品²⁾写真-2 往時の花巻精養軒³⁾

II これまでの作品群

童話「注文の多い料理店」は外観ならびに室内空間が、しばしば多くの絵本作家たちの手によって絵画作品化され出版されてきた。これらは主として絵本という形をとる場合が多かったが、それ以外の土産物パッケージ等にも登場・採用されるなど多様さを含んでいる。賢治自身と賢治作品は今日、彼のふるさとイーハトーブ（岩手県）を様々な面において支える資源となっている。以下、可能な範囲内で「注文の多い料理店」像の先行実作を掲げることとする。

宮澤賢治の生前に出版された著書は、わずか2冊だけであった。詩集『春と修羅』と童話集『注文の多い料理店』である。前者が大正13（1924）年4月20日、後者は同年の12月1日の刊行であった。後者の『注文の多い料理店』は菊池武雄が挿畫と装幀を手がけた書籍である。この菊池が描いて宮澤賢治自身も承知していた「注文の多い料理店」外観は、本研究を進める過程で基本的な資料と位置づけられよう。上記のような背景から、初版本の復刻企画としては文庫本の限界を超えているとの高い評価を受けた角川文庫版から、レストランの外観を写真-1に掲載する²⁾。その姿は切妻屋根の妻入（つまいり）西洋館で、車寄の上部2階にバルコニー（露台・ろだい）を構えている。妻入とは建築物の妻面に主出入口を設ける形式で、積雪が多い地域では除雪面で有利な建て方である。また妻面とは屋根の勾配が見える建築物の側面である。さらに写真-1の特徴的なデザインは、細部意匠にアール・ヌーヴォーらしき形態が見取れる点である。アール・ヌーヴォーと呼ばれる動植物の姿態をモチーフとする曲線を多用した新様式は、わが国の明治・大正期にヨーロッパから導入された新しいスタイルであった。

菊池筆の外観に加えて、かつて岩手県花巻の市街地（現在の花巻市上町5-13付近）に実在したレストラン花巻精養軒を写真-2に掲げる。石材を積み上げた仕上で、1階はルネサンス風で、2階はロマネスク調である。ただし全体としては重々しいバロック的な印象もある。2



写真-3 島田睦子の作品⁵⁾



写真-4 三浦幸子の作品⁶⁾



写真-5 松生 歩の作品⁷⁾

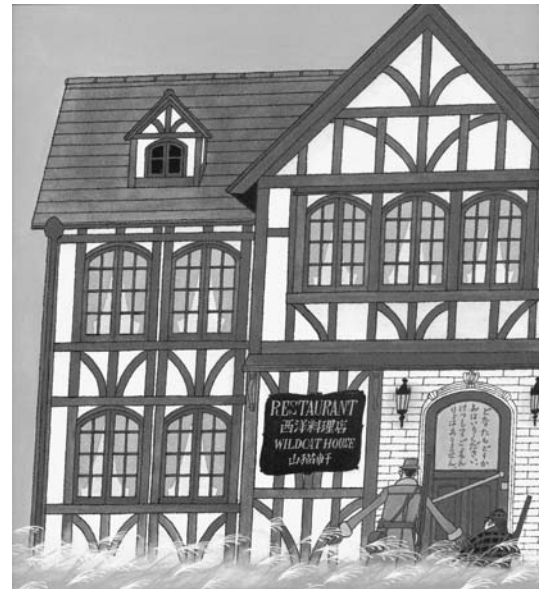


写真-6 池田浩彰の作品⁸⁾



写真-7 スズキコージの作品⁹⁾



写真-8 黒井 健の作品¹⁰⁾



写真-9 高野玲子の作品¹¹⁾



写真-10 小林敏也の作品¹²⁾

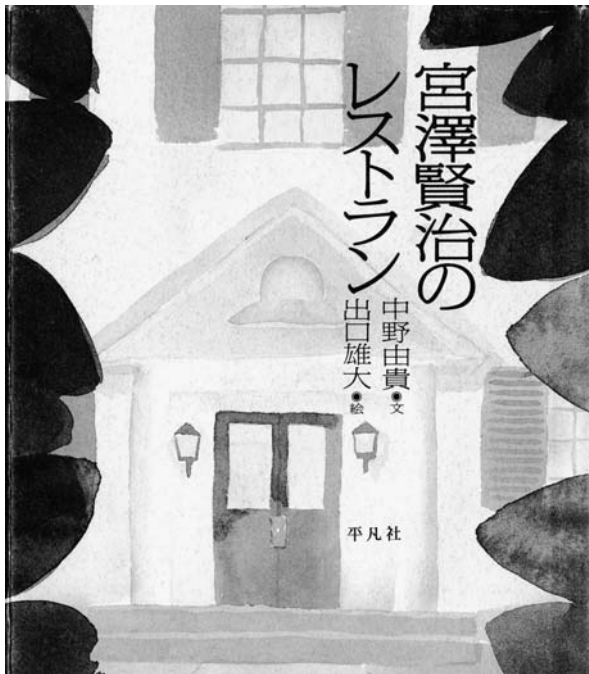


写真-11 出口雄大の作品¹³⁾



写真-12 飯野和好の作品¹⁴⁾



写真-13 山崎克己の作品¹⁵⁾



写真-14 畑中 純の作品¹⁶⁾



写真-15 和田 誠カバー作品¹⁷⁾

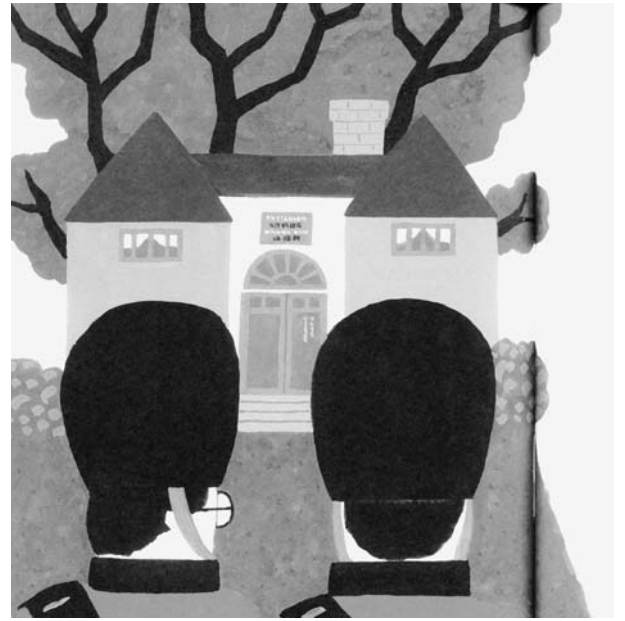


写真-16 和田 誠の作品¹⁷⁾



写真-17 百瀬義行カバー作品¹⁸⁾



写真-18 百瀬義行の作品¹⁸⁾



写真-19 柴田美里の作品¹⁹⁾



写真-20 佐藤国男の作品²⁰⁾

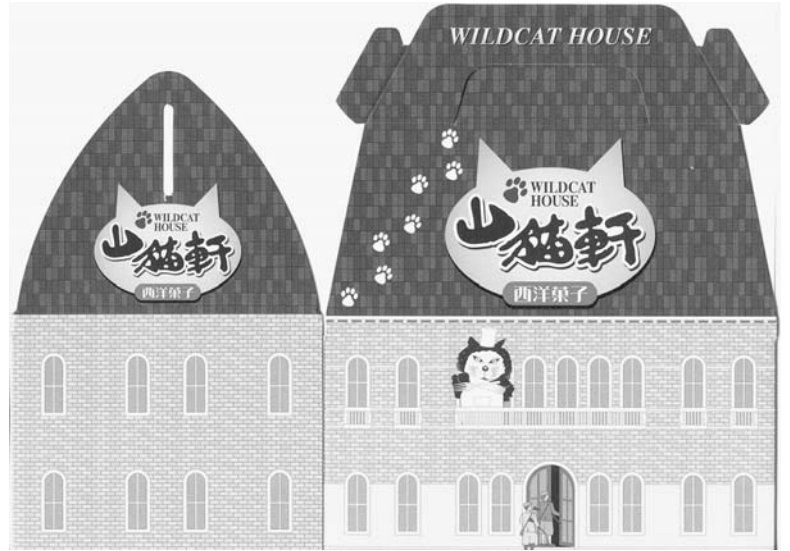
写真-21 藤城清治の作品²¹⁾写真-22 山猫軒パッケージ²²⁾写真-23 絵はがき山猫軒²³⁾写真-24 林風舎の作品²⁴⁾写真-25 賢治の小饅頭²⁵⁾写真-26 伊藤卓美のかるた作品²⁶⁾

写真-27 武井武雄の作品²⁷⁾写真-28 田中伸介の作品²⁸⁾

階の四隅に柱型を構成するコーナー・ストーン（隅石・すみいし）を組んでいる³⁾。このレストランが「注文の多い料理店」のモデルだといわれている。

写真-3から同-28は、それぞれの画家が賢治作品を読み込むことで独自の思いを表現した先行作品である。あくまで宮澤賢治の原作にこだわるとすれば、当レストランに2階部分が存在する証拠はない。しかし映像作品群を鳥瞰すると平屋（ひらや・1階建）とは限らず、相当数の作家たちが2階ないし3階建の西洋館を発表している。その最大の原因は

その時ふとうしろを見ますと、立派な一軒の西洋造りの家がありました。という一文⁴⁾があるためであろう。おそらく、この「立派な」という文言から多くの画家たちが2階建の西洋館を発想してきたものと考えられる。

上述したような状況をできるだけ正しく示す目的から、それらの全体像を提示することとした。掲載順序は、まず絵本等の書籍を優先する^{5) 6) 7) 8) 9) 10) 11) 12) 13) 14) 15) 17) 18) 19) 27) 28)}。なかには新聞紙上での連載もある¹⁶⁾。そののちに文献という形をとらない絵はがき^{20) 23)}・商品パッケージ^{21) 22) 25)}・装身具²⁴⁾・かるた²⁶⁾等を扱う。それぞれの分野ごとで、おおよその年代順にならべることとする。

以上の通り本稿では、優れた画家と企画者たちが先行して公表してきた「注文の多い料理店」像を収集する行為を中心としてデータを積みあげてきた。これ以降は、筆者なりの復元案を構築する作業に入りたい。

Ⅲ 復元平面の根拠

今回はじめて筆者なりに詳細な「注文の多い料理店」の平面を復元した。その表現手法として木版画を採用した。図-1及び図-2において復元平面図を提示する。

まず「菊池武雄の挿畫」と「花巻精養軒の写真」を照合しながら、「注文の多い料理店」の外径・サイズを大掴みにとらえる。検討の結果、当該レストランは間口およそ8メートル余、奥行が約11メートルと判断される。この数値は花巻精養軒の石積み割付から算出されるもので

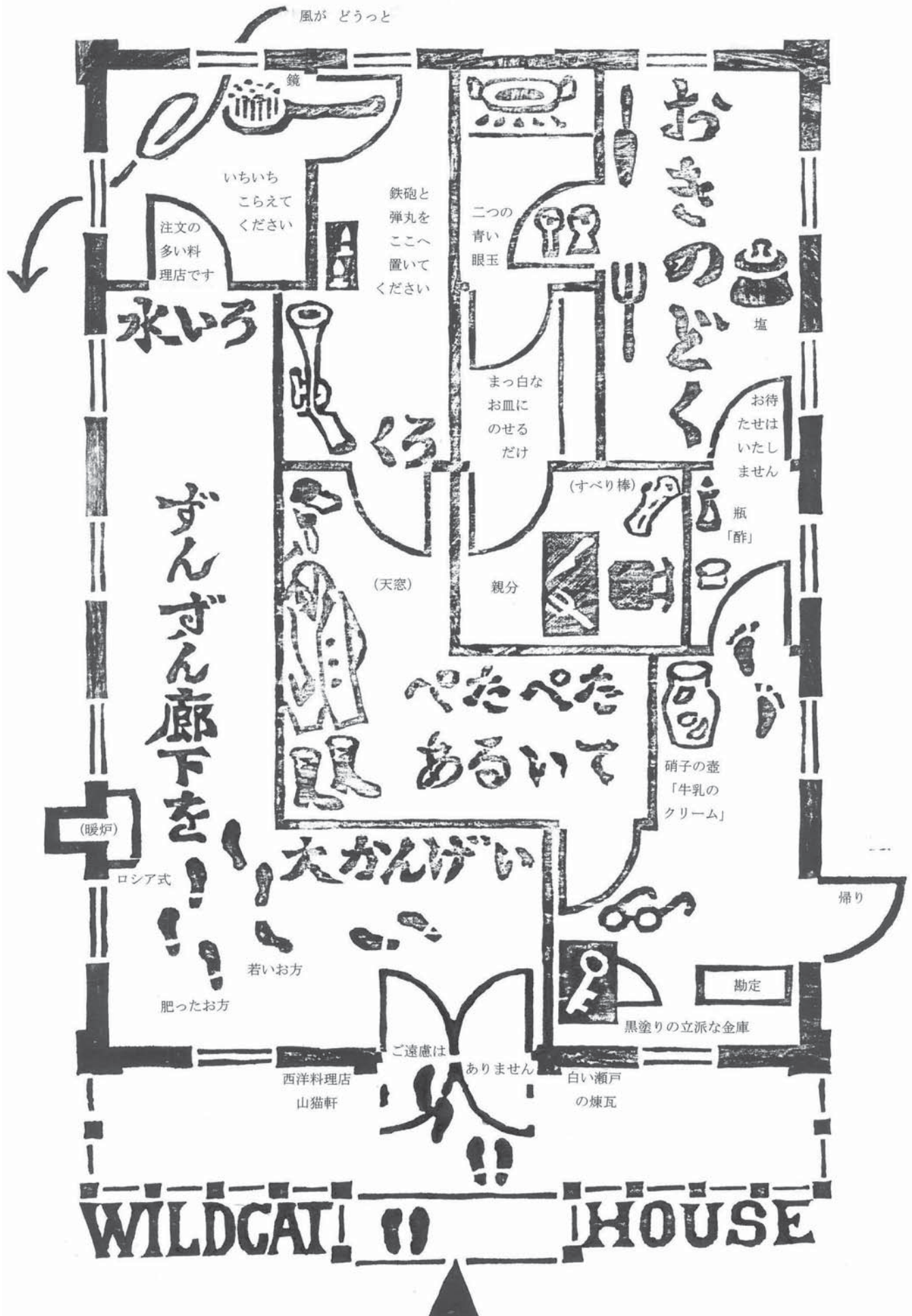


図-1 1階復元平面図

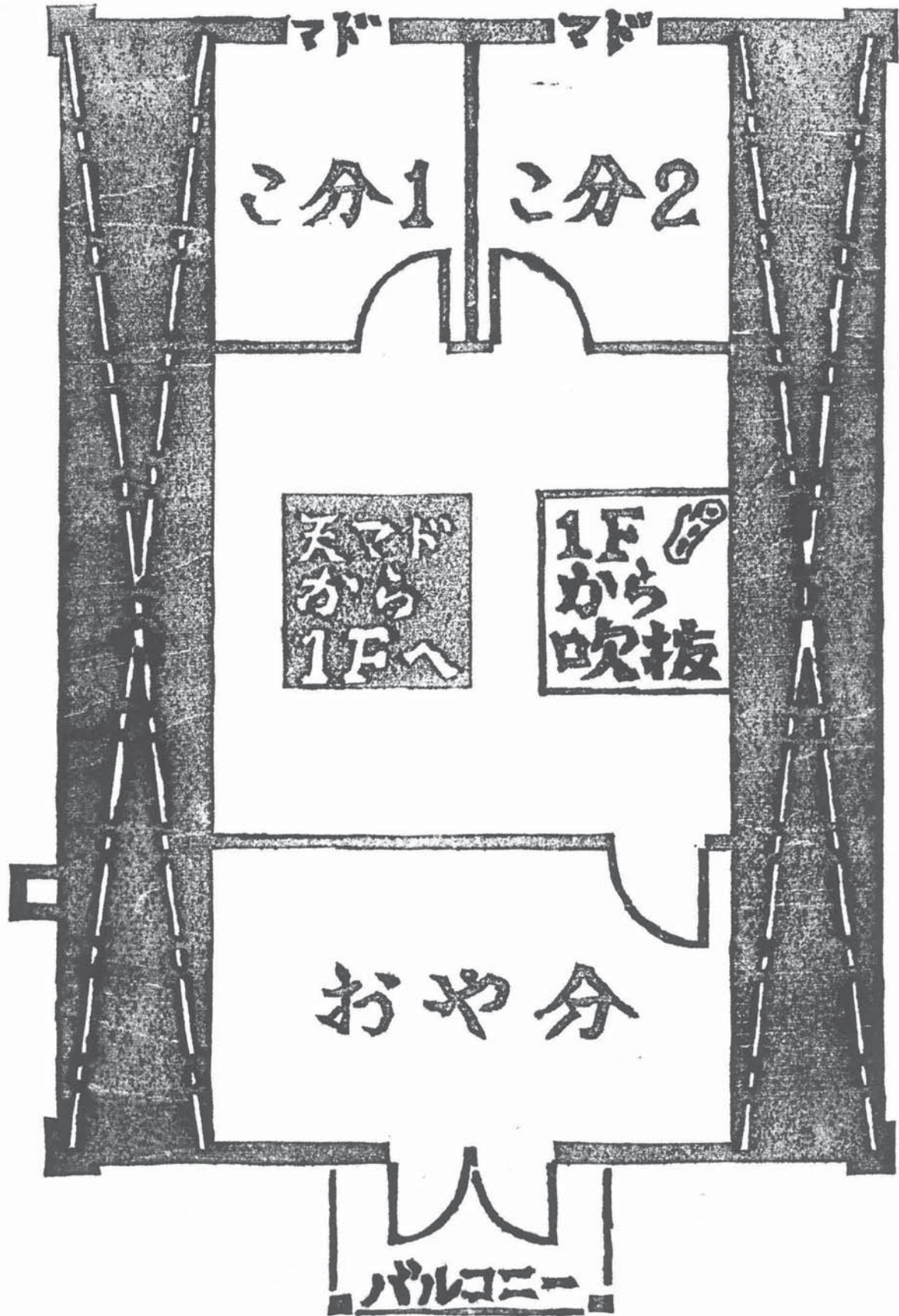


図-2 2階復元平面図

ある。上記の間口寸法に関しては、写真－1挿畫のスケールとも概ね合致する。ただ挿畫の奥行方向については、建築物が森の中に入り込むようにして端部が隠れている。このため当レストランが間口に比べて奥行が深いとの印象は、菊池武雄作品からは得ることが出来ない。したがって本研究にあっては、花巻精養軒の外観写真－2を建築物の全体規模（間口×奥行）を求める拠り所とした。

これより後は「注文の多い料理店」を原典として考察する。原作では、

玄関は白い瀬戸の煉瓦で組んで、実に立派なものです。

とある。ここでいう瀬戸とは瀬戸物すなわち焼き物を意味するが、より厳密に限定すれば陶磁器の中でも陶器類や炆器（せっき）類ではなく、それらよりも吸水率がより小さく性能の高い磁器製品を指す。そして玄関脇の外装材にそのような素材を用いる配慮は、仕上材料としての信頼性・耐久性だけでなく、清潔な意匠性つまりデザイン性を期待しての選択であった。

主出入口である玄関の建具は

二人は戸を押して、なかへ入りました。

と明記されているので、少なくとも内側へも開くドアであることがわかる。しかしレストランのように不特定多数の利用客を迎える公的（集会場）、ないし教育上（学校）、あるいは大規模な商業面（百貨店・劇場ほか）などの用途を有する建築物の出口の戸は「内開きとしないことが望ましい」という防災上の原則がある。「注文の多い料理店」は明治・大正期の建築物であるので、第二次世界大戦後に施行された建築基準法の制約は受けないものの、戦前にも市街地建築物法や都市計画法の精神はすでに存在していた。以上のような諸事情を背景に復元案では玄関を左右の両開き扉とし、しかも原作では触れられていないが外方向へも押して避難することが可能な自在ドアを想定した。ただし原文への忠実性を守る立場から、外側へのドア軌跡は弱い表現で示した。

以下順に原典を引用しながら室内空間を復元していくこととする。

そこはすぐ廊下になっていました。

そして

ずんずん廊下を進んで行きますと、こんどは水いろのペンキ塗りの扉がありました。

「どうも変な家だ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだろう。」

「これはロシア式だ。寒いとこや山の中はみんなこうさ。」

この文章をそのまま解釈すれば、玄関があって、玄関から真っ直ぐに廊下が延びており、なおも相当な距離を歩かされて最初の水色のドアということになる。しかしそのような復元作業を続けていくと、ただただ「鰻の寝床」のような一直線状の細長いプラン（平面形状・間取り）となってしまう。これでは最小限サイズの平面におさめることができない。また現実的な建築作品にもならない。

それで図－1復元平面図に示すような鍵の手に折れ曲がったプランを考案した。だが、あくまでも建築物の外径は「花巻精養軒」の規模に準拠している。また同精養軒の外観写真に見ら

れる煙突を踏襲しながら、かつては「ストーブ」と呼称されていた暖炉を設けている。ロシア式という記述を尊重した形だ。

さて水色のドアの向こうには、

ところがどうもうるさいことは、また扉が一つありました。

この文章に着目して、復元案では水色のドアの延長上ではなく横方向に別のドアがあるものと仮定した。

そしてそのわきに鏡がかかって、その下には長い柄のついたブラシが置いてあったのです。このため鏡とブラシは、次のドアの近傍になければならない。しかも彼らが身なりを整えるためには窓からの自然採光を必要とする。さらに次の瞬間には

ブラシを板の上に置くや否や、そいつがぼうっとかすんで無くなって、風がどうっと室の中に入ってきました。

品物が消えてなくなることに関しては後に述べるが、室内へ外気が速やかに流れ込むための要件としては、風の流入口だけでなく、それとは別に気流が屋外へと排出されていく出口も不可欠なのである。この条件を具備するためには同一壁面上に複数の開口部（かいこうぶ・窓あるいは出入口）が並置されているプランよりも、でき得れば対面する壁に窓が設けられていることが望ましい。少なくとも別の壁面に開口部を開けておきたいものである。復元案では角部屋を構成する2面の外壁に別々の窓を考えた。

さきほどのブラシを置いた板がなくなるという状態は、一体どのようなことなのであろうか。これを筆者は下記のように解釈した。次のドアのすぐ脇に華奢な棚が取り付けられていたのだが、ブラシを不用意に置いたとたん、その棚が落ちてしまった。そのような事態に気が動転した彼ら2名は

びっくりして、互によりそって、扉をがたと開けて、次の室へ入って行きました。

という表現になるのではなかろうか。実は筆者は、その問題の棚が壁に取り付けられた折りたたみ式の板であって、次のドアへ進む際には棚を下方に倒して壁内にしまうことで、歩行できる幅を広げることができる仕掛けかと秘かに考えている。その装置を知らぬ彼らは、棚を壊してしまったと思い込み、直し方を考えてみる余裕もなく、そそくさと次の部屋へ急いだのである。床の上にはブラシだけが残された状態であった。

鉄砲と帯皮と弾丸（たま）を預けるよう促された後に、黒い扉の中へと進む。復元案では、黒い扉の奥には外気に面した開口部が全くない。原作ではここでマッチを摺る、あるいはランプを灯すなどの記載が一切みられない。ところで物語の時刻は午後3時過ぎから4時頃であろうか。まだ日差しはあるものの、作中の季節では気温の低下を迎えているようである。レストランの所在地は「山の中」である。当然のことながら電線も電源も来ていない。ましてや都市ガスやガス灯が整備されていようはずがない。

それで筆者は写真－1 菊池武雄作品に見られる屋根左面の棟近くに位置するドーマー・ウィンドー（屋根窓、突出部の窓）に注目した。この天窗（トップ・ライト）から採光をし、その

光は2階中央のホールなどを照らすのではなく、直接1階まで届けられる仕組みである。天窓の直下2階部分にあってはデッド・スペースである。天窓は通常の壁面に設けられる窓と比較して、3倍の明るさがある。この空間構成によって明かりを点灯することもなく、

二人は帽子とオーバーコートを釘にかけ、靴をぬいでぺたぺたあるいは扉の中にはいりま
した。

となる。そのようにして次の部屋で、

黒塗りの立派な金庫

の前に立ちながら、眼鏡など金属製の身の回り品を身体からはずすのであった。加えて当該コー
ナーが食事の済んだ後に、代金を支払うための勘定場であろうと納得している。

すこし行きますとまた扉があって、その前に硝子の壺が一つありました。

と続く。その扉の奥の部屋は決して大きくはないらしい。その理由は、二つ目の「クリーム」
のに入った小さな壺が置かれていた室は、

すぐその前に次の戸がありました。

という原文である。さて、いよいよ彼らが立ち入った最後の部屋であるが、ここは

あの白熊のような犬が二足、扉をつきやぶって室の中に飛び込んできました。鍵穴の眼玉
はたちまちなくなり、犬どもはうとうとなつてしばらく室の中をくるくる廻っていました
が、

と記述されることから他の居室に比べれば、一定の広さを有していることが理解できる。

引き続き子分の山猫たちが料理と盛り付け作業の準備をして、二人の紳士を待ち構えてい
る空間について考えてみたい。

その扉の向うのまっくらやみのなかで、

と書かれているので、この部屋には外光が差し込まないことがわかる。普通ならば煮炊きをす
るコンロがある壁面には窓が設けられる。その理由は採光のためばかりでなく、換気の目的も
兼ねている。復元案で真っ暗な部分は、調理・配膳室ばかりではない。親分の食事室も同様に
窓を全く持たない、いわゆる行灯部屋（あんどんべや）である。

山猫たちは夜目（よめ）が利く。暗さなど一向に問題でない。しかも外気に接しない内側の
部屋は、1年を通して暖かい。また安全でもある。山猫たちにとっては快適な空間であろう。

最後に2階部分をどのように考えるのかという課題に触れておきたい。菊池武雄の挿畫も花
巻精養軒外観写真も2階建である。このため復元図においても一応2階を制作した。ただし階
段をしつらえなかった。山猫たちのことである。通常の階段などは必要としない。

2階の床がない「吹抜」部分に丸太を立てかければ充分である。かつて消防署内に設備され
ていた「すべり棒」に似た太目の木材さえあれば、山猫たちは巧みに昇降可能であろう。白い
犬たちに踏み込まれた山猫たちは、この丸太材を伝って階上へ逃げ、さらに戸外へ逃れ、山中
へと姿を隠す。その結果「注文の多い料理店」そのものも成立しなくなり、

けむりのように消え、二人は寒さにぶるぶるふるえて、草の中に立っていました。

IV む す び

これまで述べてきたように本研究では、菊池武雄による挿画と花巻精養軒の古写真、そして何よりも宮澤賢治自身の「注文の多い料理店」原典に記述された内容に基づいて当該建築物の1階および2階の平面図を復元した。今日的な建築学の立場からみても、さまざまな視点で妥当性を備えた興味深い結果を得ることができたと考えている。

本研究を進めるに際して御指導、お力添えを頂戴した方々に衷心より厚く謝意を表するものである。花巻の宮澤啓祐氏、盛岡の佐々木茂喜先生には幾年も御指導を賜っている。すべり棒という古称は江別市消防署の黒沢松寿課長よりお教え頂いた。北翔大学図書館の蔵書からも多大な御教示を与えられた。また復元平面図2葉の印刷をする際には、本学の版画室とプレス用ローラーを使わせていただいた。末尾ではあるが重ねて感謝を申し上げる次第である。

注

- 1) 「注文の多い料理店」宮澤賢治、『注文の多い料理店』宮澤賢治、角川書店（角川文庫924）、平成8年6月25日、P-42
- 2) 前掲「注文の多い料理店」P-43
- 3) 『宮澤賢治のレストラン』中野由貴・文、出口雄大・絵、平凡社、1996年4月17日、P-16
- 4) 前掲「注文の多い料理店」P-45
- 5) 『注文の多い料理店』作・宮澤賢治、絵・島田睦子、偕成社、1984年6月、P-9
- 6) 『注文の多い料理店（Wildcat House）』文 宮澤賢治／絵 三浦幸子、福武書院、1984年11月30日、PP.6-7
- 7) 『宮澤賢治 童話の世界』著者 中野弘彦・池田一憲・松生歩（まついけ・あゆみ）、佼成出版社、昭和60年7月6日、P-61。なお当該書籍の巻頭言に相当する「賢治の歌に和して最も美しい詩を歌ってくれた三人の画家たち」と題した文章を梅原猛が執筆している。
- 8) 『（宮澤賢治—どうわえほん1）注文の多い料理店』文 宮澤賢治、絵 池田浩彰、講談社、1985年7月12日、PP.6-7
- 9) 『注文の多い料理店』原作・宮澤賢治、絵・スズキコージ、企画・ミキハウス、三起商工、1987年11月20日、P-7
- 10) 「注文の多い料理店」宮澤賢治・作、黒井健・絵、『日本おはなし名作全集 第12巻 ごんぎつね』原作 新美南吉・小泉八雲・宮澤賢治、小学館、1989年10月1日、P-52
- 11) 「注文の多い料理店」宮澤賢治＝文、高野玲子＝絵、『日本名作絵本 [特装版] 22』、ティビーエス・ブリタニカ、1993年1月1日、PP.28-29
- 12) 『画本 宮澤賢治 注文の多い料理店』作 宮澤賢治、画 小林敏也、パロル舎、1995年4月10日、P-6
- 13) 前掲『宮澤賢治のレストラン』出口雄大・絵、カバー

- 14) 前掲『注文の多い料理店』角川文庫，カバーイラスト／飯野和好，カバー
- 15) 「注文の多い料理店」画 山崎克己，『賢治礼賛 イーハトーブ・モダン画帖』原作 宮沢賢治，画 山崎克己 オオノサトシ 内田かずひろ 山川直人 鈴木おれんじ 古谷トシタカ，LYU 工房（りゅうこうぼう），1996年8月27日，P-11
- 16) 「宮沢賢治 注文の多い料理店 1 何かたべたいなあ。どなたもお入りください。」，画・畑中 純，『北海道新聞』北海道新聞社，平成16年2月4日，P-5。この新聞連載は「宮沢賢治 注文の多い料理店 2きれいに髪をけづつて，靴の泥を落としました。」同年同月5日，P-5，「宮沢賢治 注文の多い料理店 3 塩をもみ込んでください。どうもをかしいぜ。」同年同月6日，「宮沢賢治 注文の多い料理店 4 おなかにおはひりください。ふたりは泣き出しました。」同年同月9日，P-7と続いて完結している。
- 17) 『宮沢賢治のおはなし 2 注文の多い料理店』宮沢賢治・著者，和田 誠・画家，岩崎書店，2004年11月10日，表紙（カバーも同図）ならびに PP.12-13
- 18) 『新装版 齋藤孝のイッキによめる！小学生のための宮沢賢治』編者／齋藤孝，イラスト／百瀬義行，講談社，2007年7月1日，新装版2016年6月30日，カバーおよびP-105
- 19) 『別冊宝島2453号 本当の幸せとは－宮沢賢治・修羅の哲学 宮沢賢治という生き方』編集長 田村真義，編集 山田桐子，イラスト 柴田美里，宝島社，2016年6月13日，P-72
- 20) 「山猫軒」Kunio Sato（佐藤国男），『宮沢賢治 版画 注文の多い料理店』全4葉の絵はがき。上記のほかに「新聞を読む山猫軒オーナー」「サラダはお嫌いですか」「悪夢から目覚めた若い猟師」の3作品がある。
- 21) 『注文の多い料理店』影絵 Seiji Fujishiro（藤城清治），丸一食品工業，2011年9月8日現在
- 22) 『WILDCAT HOUSE 山猫軒』末廣 パティスリーアンジュ，2011年9月6日現在
- 23) 「山猫軒」全1葉の絵はがき，『宮沢賢治の世界「注文の多い料理店」』PRESENTED by のび工房
- 24) 『宮沢賢治 RESTAURANT／西洋料理店／WILDCAT HOUSE／山猫軒』制作・販売元 Rinpoo（林風舎・りんふうしゃ）
- 25) 『雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ 賢治の小饅頭』販売者 第一物産，2012年9月5日現在
- 26) 『宮澤賢治 木版歌留多 普及版』制作 伊藤卓美，発売 奥野かるた店，2002年9月
- 27) 「注文の多い料理店」武井武雄，『宮沢賢治童話集』中央公論社，1987年。『写真絵画集成 ジュニア文学館 宮沢賢治 2 宮沢賢治の童話』編著者 早乙女勝元，写真 小松健一，編集 草の根出版会，発行所 日本図書センター，発行 1996年3月25日，P-185
- 28) 『手作りポップアップ絵本 注文の多い料理店』原作 宮沢賢治，イラスト 田中伸介，ペーパーエンジニア あらいあすか，発行所 河出書房新社，発行日 2009年2月28日，表紙